

GR  
白雲軒

# とりわ



23

昭和47年7月1日

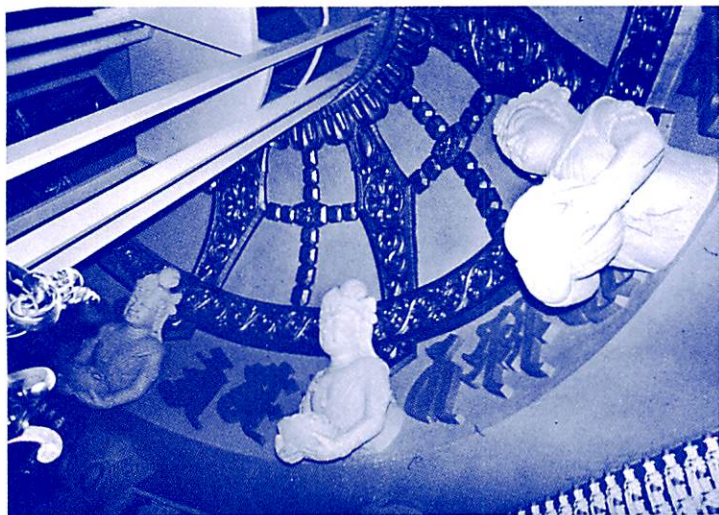
## 表紙の説明

救世大観音の見晴台に登る廻り階段(125段)があります。其の周囲にすかしぼりの丸形銅盤(直径1m)がとりつけてありまして、其の間に表紙の様な美しい金燈籠(1.2m)が八個取りつけてあります。

下の写真は天上の、大ドームの中央に、金箔の大法輪がありまして、其の下部周囲又佛菩薩等の頭籠字24枚が配してあります。

そして中央柱八本の上部には散華の花籠を持った天女が八人取りつけてあります。

表紙の八個の大燈籠と、此の中央大ドームとの調和は実に美しく壮麗であります。



中央大ドームの写真

昭和四十七年七月一日発行 23号とりる

表紙 展望台に登る階段の燈籠

裏 大天蓋の説明

目次 (1)

印度附近の旅路……………(其十三)……………桐江……………(2)

孟蘭盆と曾孫の墓参り……………(其六)……………ク……………(6)

御法話瓊仙いかだ集より……………(其六)……………(7)

「抜萃のつづり」より(熊平源藏著)……………(其一)……………(11)

西遊記……………(其一八)……………岡部千三……………(15)

医者ともあろうモノが……………(其二)……………見川鯛山……………(20)

写経塔上棟式……………(23)

写経のおねがい……………(24)

申し込用紙……………(25)

写経のお世話人芳名……………(26)

老万休観音奉安者芳名及びお願い……………(27)

鳥居観音だより……………(28)

裏表紙 鳥居観音地図

夏の行事ご案内



# 印度附近の旅路

其の十三 桐江

## セイロン島の歴史

インドのボンベイから、一気に飛行機でインドを横断して、セイロン島に飛び、入国手続きも簡単にすみ首都コロンボのホテルに着きました。

セイロン島は紀元前五世紀頃は、アヌトラプタ王国でしたが一九四八年に数回の統治国から、独立したもので、完全な仏教国であります。

人口は千二百万で、面積は北海道位の島国で、赤道に近いので、全島椰子や、バナナ等熱帯植物に蓋われ「歓喜の島」と呼ばれる如く、美しい花や鳥等色彩鮮かで、広漠たるインドから来ると、天国に来たような感じがしますし、椰子がなければ日本とよく似ている地形です。人情も純朴で親しみやすい、居心地のよい所だとの事です。

十一月二十一日早朝、一行は自動車に分乗して、見物しながら島の中央二千米の山頂にある昔の首都、キ

ヤンデーに向って出発しました。

始めは椰子やゴム等の熱帯植物や、セイロン茶で名高い茶畑、又は黄色の竹林等、皆珍らしいのです。

ゴムの木は皆キズだらけで「採汁缶」がぶらさがっております。田は日本の四国等でよく見るような段々畑が多くありまして、日本人が指導したので日本の田作りとそっくりです。

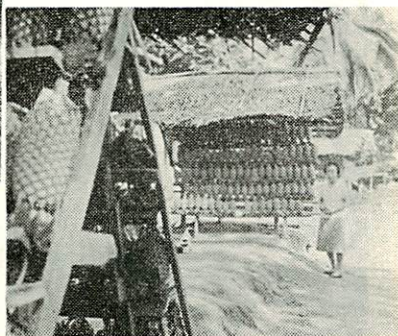
セイロン茶の製造工場を見物しましたが、旅行も終りに近づいたので一行は茶を沢山買込んでおります。其の工場の隣りには、ナマゴムの製造工場があり、見物しましたが実にいやな臭いで、お茶もこのにおいで、くさくなりはしないのかと心配される程でした。

椰子林の中で象が、大きな木材を鼻で持ち揚げて、自動車に手ぎわよく積込んでいるのを始めて見ました。又巨象の長い丸太のような鼻に腰かけると親切に言うのですが、口の中へでも入れられそうな気がして、これに腰かける勇氣のある人は幾人もありませんでした。



↑象の背に乗って居る象使が象を機械の  
様に大木を自動車に乗せさせて居る

街頭に並ぶ椰子やパインナップルの売店→



キャンデーへの  
山道は登るに従っ  
て風景も林相も変  
化して飽きません。  
キャンデー市で  
は人造湖に接する  
公園のレストラン  
で珍しい昼食を  
したのもよい思出  
であります。

## 仏 齒 寺

此所には名高い仏齒寺(ダラダマリガワ)と云う  
インド風の建築で、オーランガバットの石窟にあるよ  
うな見事な彫刻と絵でうづまっております。

この寺はアショカ王が釈尊の齒をセイロンに贈った  
のが一度中国に渡り再びセイロンに返えされたのが、  
五百年前と言う、ふしぎな因縁があります。

三月月と満月の時には廊下から参拝が出来るし、年  
に一回は拜殿の中央に飾って盛大なお祭りが、五百年  
間くり返されているとのことです。

このお寺の入口にムーンストーン(半月型)の踏石



水浴場の巨象の鼻に腰をかけると  
奨める象つかい

があるのを、白雲山の救世観音堂宇の入口に真似て御影の一枚石に模様を彫り込んで敷いてありますから、ご来山の節はごらん下さい。

セイロン島の世界的に名高い  
仏歯寺の入り口にある図書館（筆者夫妻）



第二回世界仏教徒大会が日本で昭和二十八年に開かれた時、セイロン代表のマララ・セーケーラー博士の永い演説を幾度も聞かされたものですが、博士も健在と現地で聞きました。

私は、此の第二回大会が日本で開かれた時、議長を勤めたり、又埼玉県にも各国代表が招待された事を記憶して居ります。

日本で開かれた第二回仏教徒大会のおり世界に  
ばらまかれたポスター（此の木彫は桐江作小品）



## シンガポール

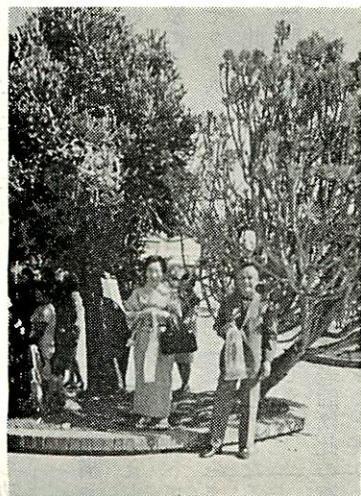
シンガポールと云う国は、東西を繋ぐ要港のため、淡路島位の小さな面積ですが人口二百万と云う世界一の人口緻密なので、自動車事故も世界一と云われております。英国をはなれての独立国でこれも大東亜戦の落し子でしょう。

市内見物をしました。日本軍が現地人を五万も殺したと云う記念碑や、山下將軍が英国投降將軍との会見の所や、山下將軍が処刑された所等は、最も印象深かったのです。

今迄沢山見た中で最も美しい公園や、船のへさきに皆、龍をつけているジャンクや、炎熱の中スコールの有難さ等、忘れられません。

宗教はヒンズー教が多いようで立派な寺院があります。又或る華僑の店で買物をしようとして私がつけた相場では頑として応じませんでしたが、自動車が出発しようとする私の言い値でよいかから買ってくれと、せめるような華僑のガメツイ商魂には感心しました。

此所にはホンコンにあるような何十億をかけた中国式の豪華な、併しグロテスクな庭園があって見物人でにぎわって居りますが、日本人の趣味には合いません



バンコック空港でレイを持ってシャブテンの大木を背景に最後の記念写真

夕方出発、タイのバンコックに着いたのは夜の十二時頃で、翌日夕方羽田に着いたのは十一月二十三日です。例によりあわて者の私は色々失敗談があつて、ビールをおごらせられた事もあります。少々はづかしいので今回はないしよに致しましょう。

バンコックの空港で良い香りのする美しい「レイ」を買つて、帰国後、鳥居観音に奉げて約一ヶ月の極寒極暑の永い旅路を御守り下された御礼の奉告を致しました。そして此の旅路が救世大観音建立に色々役立つ事を有難く思つて居ります。

合掌

この号をもちまして印度附近の旅路は完了しました。

# 孟蘭盆と曾孫

桐 江

この頃は、お盆に家族づれでお墓参りをするので共同墓地は非常に賑かだと云う事を聞いて実に有難い傾向だと思っております。

此の孟蘭盆は、「倒さかに吊かされて苦しんで居る亡者を救う」と云う意味で、生前罪深い人が地獄に落ちて苦しんで居るのを仏の慈悲心を以って之を救い大安樂の生活を与えるとの事です。

是には面白い伝説があります。釈迦如来の弟子の、目蓮尊者が永い間の修業で神通力を得たので冥界に於ける亡き母の様子を見た所、母は生前の悪業で餓鬼道におちて飢と渴により骨と皮ばかりになって悲歎にくれている有様を見た目蓮尊者は早速餓鬼道に赴いて手づから美味な食物を与え様とした所是が皆、焔と化して母の口に入れる事が出来ないで、目蓮は非常にかなしんでお釈迦様に教を乞うた所、釈迦は「汝の母は生前罪障深き業によって餓鬼道におちたのだから汝一人の力ではどうする事も出来ない、幸い修業僧が兩期で一処に住し一切の罪過を告白反省して居るから、此の大勢の修業僧に百味の珍味を供養すれば、衆僧の威神力で母は救われる」と教えられたので早速目蓮は大

供養会を行なった所、多くの修業僧の読経の功德で母は餓鬼道の苦から救われました。

我家でも、お盆（八月十三日）には家族揃ってお墓参りをし、先祖様一同を提灯と松明で御迎えし、表座敷におかざりした祭段に全部のお位牌を並べて、ごちそうを供えて観音経や戒名を読み上げて拝みます。

此の行事は朝夕行ないますが、十五日となると又、松明と提灯を持ってお墓に御送りします。

折柄私の家におられた水野梅曉老師は此の有様を見て「此の様に祖先の恩を感謝する事は子孫のために自らが家業にはげみ、行ないをつつしむ事に通ずるので平沼家は必ず栄える」と云われた事があります。

父母恩重經に「父母には十種の恩あり、父母の恩の重き事天の極まりなきが如し」と教えられて居る事から、鎌倉時代の踊念仏や、全国で行なわれて居る盆踊りも、祖先に感謝して共に楽しむと云う仏教の行事の現れです。此の春のお彼岸に、お墓参りをしたところ曾孫（五才と三才）の二人が、お墓に水をかけたりお米をあげて一生懸命おがんで居る様子を見ると涙が出て来ます。此の習慣こそ現代流行している、非行少年等を未前に防げる事と考えると、両親の子供に対する教育の大切な事をつくづく感じさせられます。合掌





道光禪師  
（故高階瓏仙貌下）  
御法話

（其六）

（十四）禪の宗意から仏教を話す（つづき）

精神の修養について、前号では、安静につき申述べましたが、安静に対して活動の方法を、次のように、説いております。

活動とは機に触れ物に応じて得脱自在無礙なるを云う。活動の自在は物に任せざるにあり。物に捉われざるにあり云々……。

自由自在の活動をするには、物ごとに捉われてはいけないと言ふことです。事が住滞すれば円滑を失い、禍を生じます。水は流れが止って溜ればどぶ池になって腐り、人は便秘すれば病氣のもとになります。

精神も同じであります。いろいろの問題で停滞すると悩みが起り、仏教でいう煩惱を生じます。

財物、色情、食物、名与等の慾望に捉われれば、必

ず失敗を招きます。道光禪師のお言葉に『放てば手に充つ』とあります通りで、握ったまま放さねば、それ以外の物を得る事が出来ない真理をよく現わしています。ですから、何物にも束縛されずに、正し活動即ち生き方をするため、最初に行なうことは、自分が自身に捉われておる事を捨ててかからねばなりません。

修養の本意は、自分を一度捨てること、即ち己れを空しうして、始めて更生した自分が生れます。

ところが自分を捨てることは、なかなか難かしいのですが、思い切つて捨てて、無我の心にとびこむと、こんどは無我から出て来た自己ですから、総ての慾などに捉われない、自在の流動が得られ、正しい生き方即ち活動が出来るようになります。すでに幾度も申しましたように、人は本来『空』であります。空は何物にも捉われませんのでよく活動し、物に應じ機に触れて住滞することなく、恰かも月影がどんな水にでも影を写すような道理であります。弘安年間元寇襲来の一、大非常時にあたり、難局を切りぬけた執権北條時宗を頼山陽が『相模太郎智は神の如く、胆は斗の如し』と評していますが、その実、時宗は生来臆病でありましたが、祖元禪師について参禅し、『時宗おまえが臆病なのは自分に捉われているからで、自分を捨てよ』と

祖元禪師に悟され、一心に修養した結果、難局を見事に切りぬけて、英名を遺す人物となつたのであります。

自分を捨て、命も金も欲しくない、従つて怖いものない人になれば、大胆な仕事も出来ます。

西郷南洲が『命も、金も位も欲しくない者は始末に困る。併し此の始末に困る人でなければ、役には立たぬ』と名言されましたが、その通りであります。

信仰により国家社会のため、己れを捨てる心掛の人が多数出てくることを、今こそ痛感します。

次は『世間』という項目で解釈を述べています。

『世間とは人の集合せる有様を指称せるもので、亦空の所現にして本来空なり。然れども人々は、色声香味触法に迷い、自己の空なるを知らず云々』  
而して仏心の中の三毒、五欲に執着して、自覚しない人の集りを指摘しています。

三毒とは貪瞋痴のことです。

貪慾の心は、自己を苦しめ、他人を禍いする毒素です。次に、世の中のことが、自分の欲する通りにならないと不平をおこし、腹を立てる、それが瞋恚の煩惱です。第三の痴とは、愚痴のことで、仏教では、己れ

が、われがというこの捉われから眼のさめない者は皆愚痴と言ひ、争いの元となるものです。例えば、自分が死ねば、指一本動かさせません。それでいて、生きている間伶俐巧ぶつて自己本位になり喧嘩まですることを愚痴の煩惱といひます。以上が『三毒』です。

五欲は、財色食名睡のことで、読んでおわかりのように、財産物欲、色欲、食欲、名譽の欲、そして、睡眠欲——なまける根性も含み——この五欲が、修養が足りないといふ、心中に渦巻くのが世間の集りです。

そこでこれを治療（濟度）する方法を説明してありますが、その前に、このような世の中に処していく心得を説いたのが『社交』という事です。

『社交とは世間に於ける関係のことで、交易と感情であります。この二つを心得て社交に立つていけば、間違いを起しません』と説いています。

交易とは、有無相通じ、たがいに利益すること、有形、無形の交換する材料を多くもつことが必要です。自己を修養して精神的に、交換するものを持ち、世間を益することが大切であります。

例をあげて、お話ししましょう。

(一) 職業 世間は交易ですから、需要の多い業務を撰び、世間を益すれば、自己をも益することになる。

亦他の利益が多くなれば、其分に安んじ、専心其業に出精すべきです、が、時勢に依じて業を移すことも、必要です、即ち仏教で言う空の活動ですから、自由自在に処すべきです。ここで注意すべきことは、徒らに氣移りすることが一番悪いので、一心が定まらないと成功しません。例えば植木を気ままに植え替えすれば、いぢり枯してしまふようなものです。自己の直面している職業を守ることが大切です。

(二) 資産 物的交換材料として有力なものです。

資産とは、金銭、物品等有形上人生に必要なものの総称で、能く世間を益するものですから、刻苦勉強して勤儉の徳を心掛けて、貯うべきです。是亦本来空の活動ですから、時に依じて能く之を散すべきであると説いています。大いに貯わえ、そして世間のために、役立つ立たせるべきで、財に執着して散ずることを知らない人は、財の活動の生命を失つて有財餓鬼に墮ちるだけであるといましています。

(三) 地位 地位もよく世間を益するものです。

勤勉刻苦して高等の地位を得、人を益すべきであります。然し自己の名誉や利益のために、地位を得ようとすれば、不純が伴い、かえって害毒となります。

それと反対に『世の中はどうでもよい。地位も何も

要らない。どうか生きて行けばよい』という人は、本来空の自在にそむくこと、即ち社会生活にそむくこととなります故、慎しむべきであると説いてあります。

(四) 学問 世間を大いに益するものです。

世間に必要な学科を撰択し、勉強し其奥義を究めて社会を益すべきです。この世は仮の世界だからといって情けてはいけません。役者俳優が、舞台はマネゴトだから、どうでもよいというのは、芸術として生命を失ないます。立派な役者俳優ほど一つの所作も侮ってはいけません。大乘的人生を有意義に生きましよう。

(五) 技術 世間必要の具であります。

(六) 学問と同じく修行して、社会を益するものです。

(七) 勞力 世間を益するもので、狭義の労働ではなく、心身の勞力は、養うことにより、社会生活に大切な役割をもたります。

(八) 智識 常に心にとり入れ、貯えること。

(九) 經驗 日常之を得て、生活に生かすものです。

(十) 交際 広く世間に交るときは自他の利益多し。

即ち交際は人生に必要で、それには自己を捨て、清濁併せ呑む抱擁力を生むと、自然交際が広くなります。

自我の強い人は狭量で、交際を狭めるのです。

さて以上交易に関する実例を挙げて、お話ししました  
が『前述列記の外荷も世間を益すべき事物は之を取  
て用うべし』とあり、更に有形無形の世間を益する交  
換材料を持っていなければ、この世に立っていきませ  
ん。世間を益する力を貯えましょう。

次は社交上に要する感情であります。

感情は事に触れて心意の発動することを言います。  
世間は概して六根五欲から来る感情に支配され易いた  
め、世間の感情を観察し之に応じて活動する必要があ  
ります。(これ亦本来空の活動であります) これも例  
を挙げて教えておられます。

第一は、人格と品行とであります。

人格は高尚にもたねばなりません。併しそれは修養  
により自然に出来た高尚でないといけません。(本来  
空なる故) 自己の職業や身分に応じないで高尚ぶろう  
と思つて強てやると、気障になります故、若い時から  
心掛けて人格を作る修養を怠つてはなりません。

次の品行は、方正にして廉直であるを要します。

併し是れにも活動が必要で、緩和の自由自在がないと  
世間が窮屈で面白くありません。

豆腐主義という肩のこらない俗謡があります。

浮世は豆腐で渡れ、まめで四角で、柔かく。

第二は態容です。態容は安静にして、自己の職業に  
応じるのが良く、軽騒をつつしむように説かれていま  
す。平常はおちつきがあり、鷹揚なところがなければ  
人から信用されません。緩行大步とか牛歩とか言つて  
昔から良い態度を表現しています、併し火急の時は別  
でして臨機応が必要です。

亦顔貌ですが、是れは生れつきのもので、設計変更  
出来ませんが、心の表現ですから、精神の平和を保ち  
温順で柔和にして、常に春風に触れるような気分を人  
に与えるよう心掛けることであります。といつても、  
いつもニヤニヤしてはいけないので、不動明王などで  
わかるように時には衆生済度の親切心から、怒り(教  
え)の形相も必要となります。

次は言葉使いです。これは端的に出て来るものです  
から、よほど気をつけねばなりません。

『言語は意志を通ずるを以て足れりとす。多からんよ  
りも少ない方が良く、華なるより実なるを良しとす』

言葉多ければ品少しですが、程度があり多少の綾が  
必要です。『直言よりは温言が良く、理論より情実な  
るが良し』と説かれています。華即ち巧過ぎて多言す  
れば追従として嫌われ、忠告もズケズケ直言すれば、  
却つて反感をもたれます。真心こそ大切です(つづく)

# 拔萃のつづり (其一)

広島金庫店社長

熊平源蔵著

「拔萃のつづり」と云う本が、広島市の金庫店の、熊平源蔵殿のお考えによって、発行されている現物を拝見して、心にひびくものが沢山にありましたので、その本から、資料をいただいでとりぬるの中に転載させていただくことになりました。

謹んでご紹介いたします。

## 毎日笑顔を 那須政隆

笑顔は人にも見せ、みせてももらいたし、

笑顔から健康や、家庭、社会の平和が生れる。

笑顔は人生、社会を明るくし、自分自身も明るくする。

今日一番の大きな損失は一度も笑わなかったことである。

無財の七施の中に顔施の言葉がある。

何はなくとも 笑顔で施しができる。

笑う門には 福来たる 笑顔こそ福の神。

## 観音信仰と生活

私もこの世に生を得ているものにとって、お互いに幸せを願う世の中の平和を念願するのであるが、にもかかわらず実際の生活は、仲々思うようにいかない点が多いことである。

昔から「ままにならぬのが浮き世のならい」とか云っているが、一体どうして苦が多いのか。今日の日本の社会の状態をみても、幸せをと歌にまで歌いながら、本当の人間生活はどうなっているのか、問いたくなる。

終戦後、日本は幸いにも国民の努力によって、経済的にも非常に発展し、今日では世界でも屈指の豊かな国になって、その点はまことに結構に違いない。しかし物質的にめぐまれた時代になりながら実生活は、必ずしも物質に比例した幸せとなってきたわけではない。そこで、これらの原因にふれてみたい。

立場によって色々の原因が考えられるかも知れない

が、少なくとも現代の苦惱の元は、人間のおもい上がりにあると思われる。一口にいって、人間が自分の命を本当の意味で知らないから起こってくるのだと思う。

私共は平素自分の命を自分の力で生きて、自分の力で自分のまわりを自由意志によって解決してゆくのだと考え勝ちである。ここに大きな過ちがある。

私共はこの世に自分で生まれようとして、生まれたのであろうか、答えは一樣に自分は生まれようとして生まれたのではないと云う返事が頭に浮かんでくると思う、全くその通りである。つまり生まれさせられたのである。また人がこの世から去って行くときも同じである。お互いいつまでも生き永らえたいと思いがらも、どうしても死んで行く、死なされるのである。

さらにもう一つ考えてみたいことは「人生五十年」と云い、成人式を迎える頃までは、人間の発育成長期であって、若々しいその身体のまま生きられれば、これにこしたことはないと思ひ、若くありたいと願ひながらも老けて行く。

自分の自由意志によって、老いの姿に変わったのではなく、自分以外の大きな力によって生老死させられ

ている事実がある。それは何であるか。今日の学問から云えば、或いは自然の法則とも云いたいところだろう。

仏教では我々の生命を生老死せしめている根本の力を仏法の法と云う。法を解り易く云えば真理、理法、道理とも云う。その仏法の法とはどんなものであろう。

こんにちのアポロ計画などにみられる自然科学は素晴らしい進歩をとげているのであるが、その科学は人間にとって必要なものでありながら、万能ではない。科学は科学としての分野があつて、科学が解決できる分野と科学で解決のつかない分野がある。世界的な科学者アインシュタインは「この世界は自分の科学では到底手が届かない。だから自分はこの科学をのり越えた神の存在を信ずる以外に道はないのだ」と訴えたことがあるが、また大学を定年退職される湯川秀樹博士は「これまでの自然科学、とくに物理学の基礎的研究に加えて哲学を勉強してみたい」と語っておられた。なるほど科学を探究した極限の人の配慮だとうなずいた次第だ。これらのことは宇宙に点在する無限の神秘のあることを証言した言葉であらう。

自然科学をもつても捉えられない無限な宇宙を、私共はどうしたら捉えることが出来るか、それは自分自

身が無限なる大宇宙の中に没入する以外ないのである。私がある事柄の一つを知ったと云うことは、知ったものを区別したことであり、例えば男性を知ったと云うことは、男性と女性の区別を知ったことである。一般には言葉は知ると書いてあっても、そのときの知るは限ると云うことだ。仏法で知ると書いてあることは成ると云うことで、そのものになりきってしまふ。その意味で、知ると云うことは領くと云うことで、自分がそのものになりきって領くしか道がない。では、どうしたらその境地に入れるかと云う問題が起こってくる。

この宇宙の根本の力を仏法と云い、仏教で云う真理であるが、単に二と二をたすと四になると云うそんな抽象的なものではない。例えば火はあついものだ。それは道理であり真理であるが、その火があついと云う真理は頭の中で考えたものではなく、現にもえつつ働いているから、あついと云う火の真理にふれることができる。

アメリカのアポロ十二号にしても、宇宙の無数の道理にあわせたから、月へ行けたので、宇宙は決して、でたらめではなく、無数の真理によってなり立っている。そう云う無数の道理、真理をなりたたせている力

これが仏法である。

そこでもう一度、根本の力について考えてみたい。

根本の道理は一面では智慧あるいは真理性であり、そしてもう一面では、万物を育み発展せしめる力である。この二つの働きをもっている、前者を仏智と云い、後者を仏の慈悲と云う。

この世に生れたことは、如来の慈悲によって生かされていると云うことであり、無限の力が私を助け育て下さっているのであるとわからせてもらうのである。さらに慈悲には二通りの慈悲があつて、例えば父親のゲンコツは子供に対する慈悲があやまつてのものであるに対し、母親の慈悲は涙である。

観音さまは抱きてのお慈悲。叱りての慈悲は不動明王などで、それは折伏、折檻の姿をあらわしている。

この慈悲の観音さまこそ、宇宙の一切のものを広くみ育て、あらゆる面にあらゆる方法をもって我々の願いをうけとつて、達成せしめて下さるお方である。

観音菩薩はただ三十三身を現するだけでなく、無限の慈悲と救いを成就して下さるのである。南無観世音を唱えるとき、あなたの生命があなたの生命ではなく、あなたの生命は観音さまの生命となつて道が開けてくるのです。観音さまとともに生き、観音さまと

もに死する。この決定ができた時宇宙の力、慈悲のみに手を抱かれて自然法爾のままに、安らぐことができ。この時無限の宇宙と、限りある私が融け合って、観音さまが私に成ってゆくのである。

まず観音信者の中から本当の幸せを作りだし、平和な社会を建設して行きましょう。幸せや平和は外に待っているものではない。交通事故防止のために道路拡張もさることながら、もっと大事なことは、お互いの心の中に交通安全が確立されねばならない。同様に心の中に幸せをもち、心の中に平和をもたねば、真の平和な社会は実現できない。自分の心の中に幸せをもち、それを人々に分ち、互に幸せであるように努めて行く、それが仏教的な人生の営みと云うものである。このような生活を、織りなして行くとき、私の仕事も自分のためばかりでなく、社会のためにも役立つのだと云う心構えで、仕事にいそしむ、その時生き甲斐、働き甲斐が意味づけられる。

ところで一つ順序を正しておきたい。私達は生きることが最初にきて、死ぬるといことが最後に来ると思っているが、いつでも一期一会である。

人生にはやり直しがなく、今日一日は二度と来ない。千載一遇と云う言葉通り、千年にも万年にもたつ

た一度しか遇わない人生である。生まれてくる前も真暗、死んで後も真暗な世界なのである。生前も永遠の死である。そういう永遠の死の中に、僅か五十年の人生を恵まれた。水の泡にも似たるとお経にしめされているが、永遠の空間の中で一点の泡とも消える人生で、しかもこれが一期一会だと知らされるとき、この生命は実に尊く、今日の一日を真剣にもっと価値あるものに生きてゆかねばならない、その価値づけこそ、観音さまとこの一遇を生きることである。

このように考えてくるとき、私たちは観音さまが、生命のみ親であり、万物をはぐくみ育てて下さる慈悲の権化であることが、よく解って頂けたと思う。

まことに、観音さまこそ、私たちの苦悩を救ってくださる大慈悲のみ仏である。南無観世音菩薩と手を合せて拝めば、即座に救いの手をたれさせられ、有りがたきご利益をこうむることができる。観音さまと諸共に生き観音さまとともに死ぬ、生死の一大事は観音さまにおまかせして生きる、そこに無上の自由と安楽があり、意義ある生活がある。

(真言宗智山派管長広島観音会講演要旨)





# 西遊記

(其の十八)

岡部千三

## 観音さまと悟空

その翌日、鎮元子は、家来を呼んで、三蔵法師を、皮のむちで力一ぱいに打たせた。すると、法師は、柳の木に化してしまった。つづいて悟空を打たせてみたが、これもすぐに柳の木に、八戒もそして残る悟浄も柳の木になってしまった。

「さるのやつ、術をつかいおったな、どこへにげたかそうはさせぬぞ、それみんなおいかけろ」

鎮元子は、けらい達をばげまし、黒雲にうちのつて追いかけた。その様子を感じた悟空、

「きたか、鎮元子。うるさいことだ、よし相手になつてやろう。」

悟空は、如意棒をふりながら、鎮元子に向つて行った。

鎮元子は、にやり、わらつて、そでをひろげながらじゅもんを唱えた、すると悟空の体は、この前のよう

に、すうーつと吸い込まれて行った。悟空の次に法師八戒、悟浄も、そして白馬までがそでの中に入ってしまった。

さあいくらあばれても、どなつてもどうしようもない。又昨日のように五莊観へつれられて行ったのである。

「さて、どうしようかな」

鎮元子は、何か考えたようだ、けらいに大きな釜をさがし出させ、これに油をいっぱい入れて、ぐらぐら煮立たせた。

「おい、おい、そこで油なんか煮たてて、何するのだ。」と、八戒が首をのぼしてきいた。するとけらいが、

「わるいやつらを煮るのだよ」

「わるいやつらと云うのは、一体全体だれのことよ」

「だれのことかなア、そのへんにいるようだなア」と鎮元子は、わらいながら、八戒の方をゆびさした。

「うへっ。」と、八戒首をすくめた。

「ここで、こうしてはおられぬぞ、お師匠さまを、油あげにされてはたまらない。」

悟空は、そばにあった石を、先ず自分の身がわりとして、さっと空へとびあがると、そこに浮んでいた雲にのって、雲の中から、下の状況を眺めはじめた。

そんなことはちっとも知らない鎮元子のけらいは、悟空をかかえて、釜の中へなげいれようとしたが、その石は重くて、どうすることもできない。

大ぜいがかかって、やっとのことで釜の中になげこんだが、その石のおもみで、かまの底がぬけてしまった。やア……これを見た鎮元子は、ふしぎに思い

「これは悟空めではない。ただの石だ。さるめ、またうせたな。」と、くやしがること、はぎしりして足をばたばたした。

「しかたがない。さるは、あとでひとつらえてやる。法師をなげこめ。」

「はっ。」

けらいは、別な釜を持ち出してきた。そしてその下からどんだん火をたいて、油をわかし、三蔵法師をなげこもうとした。その時、

「鎮元子、まで、まで、まってくれ」と悟空が、空からすばやくとびおりてきた。

「おししょうさまに、らんぼうすることはゆるさぬぞそのかわり、かまには、この悟空さまがはいるぞ。」

「いい度胸だ、油あげにしてやるう。」

「おお、いいともよ、おししょうさまのおいのちにはかえられない。さあやってくれ。」

悟空は、かくごしたようにはつきり云った。さすがの鎮元子もこれには感心した。

「えらいぞ、さる、とうとうわしのほうが負けたぞ、ししょう思いの心は、見上げたものだ、そのうえ、仙術もなかなかなものだ。お前を釜ゆでにするのはおしくなった。にんじん果の木を元どりにすれば、お前

ばかりでなく、他のものも助けてやるう。どうだ。」

「やってみよう。けれど、その前に、おししょうさまのなわをといて、自由にしておげてくれる。」

「いいとも、そのかわり、にんじん果だけは、元通りにできるな、ごまかすと本当に油あげだぞ。」

そう云いながら鎮元子は、法師たちのなわを、ばらばらに切りはなした。

「おししょうさま、おききの通りです。わたくしは、にんじん果の木を生かす方法を、誰かに聞いてきます。それには三日の間、おひまをください。」

悟空は、法師のゆるしをうけ、ただ一人、きんと雲

にのつて、天上へとんで行った。その様子と云つたらまことに真けんそのものであった。

天上であちら、こちらと仙人達をさがした末、ある仙人をたずねあて、五莊観のできごとを語り、にんじん果の木を生かす術の教えを乞うてみた、けれどもどの仙人にも、いいちえが出てこなかった。

「せっかくだが、わしの仙丹は、木や草にはきかないのだよ。」

「わたしの仙薬も、おなじことだ。」

仙人達は本当に気の毒そうに口、口に云つた。

「いえそれならば、けっこうです、他所へ行って聞いてみましょう。おじゃましました。」

悟空は、仙人達に別れて、今度は南海の観音さまのところへとんで行った。

これをごらんになった観音さまは、悟空をかわいそうに思召して、ふだ岩と云う岩の上まで、お弟子の守山大神を迎えに行ってくるよう指図をした。

やがて悟空、ふだ岩の上にさしかかると、

「悟空、まっていたぞ。」どこからか呼ぶ声があった。

悟空その方を見ると、これは、これは、黒風山でたかかった、黒大王と云う、あくまの化物であった。

「なんだ。黒風山の化物くまではないか、えらそうに

云うな。それともまた、ひどい目に合いたいとでも云うのか。」

と云いながら、例の如意棒を出そうとすると、

「悟空、気が早すぎるぞ、今は化物くまではない、守山大神と云つて、観音さまのおでしたよ。わざわざ迎えにきてやったのに、おこる者があるか。ついて参れあちらで、観音さまがお待ちになつてゐる。」

これには悟空おそれ入つたかっこうである。

「それはありがたい。失礼なことを申してすみません守山大神さん、よろしくたのみます。」

如意棒を耳へしまい、うやうやしく、大神に案内されて、観音さまのところへ行つた。

悟空は、観音さまにわけを話したところ、にんじん果の木をもと通りにしなければ、三蔵法師さまのいのちがないと云うのである。云いながら思わず悟空の声がつまつてしまった。

観音さまは、うなずいてきいていらつしゃつた。

「もっと早くここへ来ればよかつたのに。」

「では、よい方法がおりますか、おししようさまのおいのちはたすかりますか。」

「わたしの持つてゐるかんる水には、ふしぎな力があるのです。これでにんじん果の木を生き返らせること

ができよう。悟空わたしも行くぞ、ついて参れ。」

「ありがとうございます。あなたがたさまが行ってくださいれば、それこそ千人力です。悟空おともをいたします。」

悟空は、かんろ水が入れられているかめを持って、

観音さまのあとにしたがった。

観音さまは雲を呼び、風をおこして、一と飛びに、

たちまち万寿山五莊観へ、向って行った。



## 悟空の破門

五莊観の鎮元子は、観音さまのおすがたをみるなりおどろいて、表まで出むかえた。

「わざわざ、おいでくださったのは、どのようなご用でございますか。」と、おそるおそるたずねた。

「悟空のいたずらを、ゆるしてくれ……。三藏法師は、経文をとりこまいる大切な使いだし、悟空は、その弟子と云う関係にあるので、どうかゆるしてやってくれまいか。」

「はい。あなたがたさまが、ゆるせとおっしゃるのなら、ゆるさぬわけにもいきません。でも、にんじん果の木はどうなりましょう。あれは、わたしのだいじな宝もので、枯らしてしまつてはこまります。」

「にんじん果の木のこと、わたしにまかしておいてくれ、かならず、もとの通りにできると思う。まず、そこへあんないしてくれないか。」

「にんじん果の木さえ、もとのようになれば、何も云うことはございません。どうぞこちらへ、……」

鎮元子は、観音さまを木のあるところへあんないした。

にんじん果の木は、いためつけられ、たおれたまま

で、いまにも枯死寸前である。

「これはひどいぞ。」

観音さまは、柳の枝を折って、かんろ水のかめにさしいれて、たっぷりかんろ水をしみこませて、にんじん果の木の根元においた。

するとまもなく、ふしぎなことがおこった。その土をおしのけて、きれいな水が、ごぼごぼとふき出してきた。

「このふきだす水を木にかけてやれば、枝も葉も、もとのようになるだろう。」と観音さまは、静かに云った。

鎮元子は、枝や葉に、清水をかけてやると、たちまちにんじん果の木は、生き返り、その葉かげに、あかん坊の形をした実さえもついていた。数えてみると、その実は二十五ついていた。

「はてな、あのときは二十三しかなかったが、二つふえたぞ、どうしたわけだろう。」

悟空は、子どもをにらみつけた。

「おまえたちは、三つしかとらないわたしを四つとったと云ったではないか、一つは土の中にもぐっていたのだ、それが木にもどったから、一つふえるのがあたりまえだ、どうだ齊天大聖さまは、うそは云わないぞ

わるかったと思ったら早くあやまれ。」

「すみません。」

子どもは、びよこんと頭をさげた。

「でも、おかしいな。ぬすんだ人にあやまるなんて、こんなことはじめてだ。」

「あはは、わるいことをしておいて、人をあやまらせるなんてはじめてだ。」と悟空もわらった。

鎮元子も、にんじん果の木がもとのように生き返ったので、きげんをなおし、法師たちに、心からごちそうをしてもてなした。

法師はからだげ元気になる、悟空達を引つれて、また旅に出かけた。

野をこえ、山をこえ、そして川をわたり、そして又山にかかった。途中で

「きょうだい。腹がへったな。」

くいしんぼうの八戒が、悟空に云った。

「どこかで、家を見つけようや、そして、たべものをもらうことにしよう。」

「またたべもののか、お前の云うことは、いつもきまっているぞ。」

悟空は八戒をからかってはみたが、自分も腹ぺこでいたのである。

以下次号へ



媿

ウチの奴が、腹が痛いと言いだした。妊娠はしているが予定日は来月である。どうせまた、食いすぎだろう。それにしても、美事にデカイ腹である。もし双子でないとすれば、アトの半分は食物がたまっているのに違いない。だが彼女にはヒマシ油が効かない。そのアブラさえ彼女は残さず吸収して、己が脂肪に貯え、ますますフトル

「これは赤ン坊のぶん」

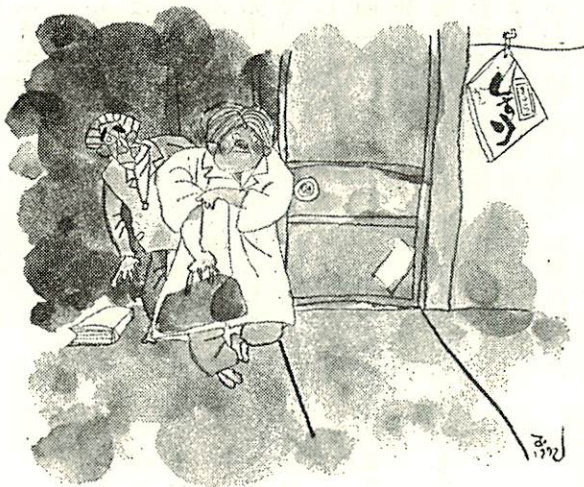
彼女はソウ云って、悠に私の倍は食べる。そのくせこの前は煮干のように痩せた長男を生んだ。コレは詐欺である。

今度の腹痛だって食いすぎにきまっている。だから私は、胃散でも買ってきて吞めと云っておいた。夕刻になつて

「腹だけでなく、腰の方まで痛い！」

## 医者ともあろうモノが (其ノ二)

挿絵 おおば比呂司  
見川 鯛山



と、顔をしかめた。

「そりやお前寝ぞうが悪いから冷えたんだ。トクホン貼ったらどうかネ」私がやさしく云ったのに、ウチの奴は本気で怒りだした。

「医者のかせに、胃散だトクホンだと、いったいアンタ、注射も打てないの!!」

私は口答え一ツせず、火鉢の引出から古いトクホンを探し出し、火であぶり、ウチの奴の壁のような腰にペタペタと貼りつけ、そして優しく云ってやった。

「どうだネ、少しは楽になったか?」

だが彼女は怖い顔で云った。

「駄目だね。今日のは、いつもの食べすぎと違う。ワタシ産婆さんに診て貰うヨ」と早いとこ医者にみきりをつけた。

産婆が来てくれた。白衣の腕をまくりあげて、強そうな女だった。体格の良い二人の女たちは、気が合うらしく、隣室でゴソゴソと喋っていた。私の悪口を云っているらしい。突然、産婆が私に怒鳴った。

「お産が始まるんだよ先生!! 仕度だ」

ドナられて、私は急に忙しくなった。湯を沸かしたり、タライを用意したり。そして時々、そつと隣りを覗きこむと、また叱られる。

「男はアッチへ行つてなさい!!」

私はアッチへ行つてることにした。

夜になつても、まだ赤ン坊は生れなかった。心配になつて、産科学の教科書をつぱり出して読んでいたら、産婦がドシンドシント、女人夫みたいな足音を立てて起き出してきた。

「便所か?」私は訊いた。

「アノ産婆さん、妾の布団に割り込んで、高イビキで眠っちゃつてるの。妾、寝る場所とられちゃつたからずつと坐つてたの、だから腹へっちゃつた」

「じゃあ、牛乳でも飲むか?」

「駄目。そんなもんじゃモタないよ。妾、天井がいいアンタも食べたなら?」

「大丈夫か、そんなに食つて」

「あたり前よ。今のうちに食べておかないと、お産に力が入らないからネ」

またしても赤ン坊をダシにするのだ。私はソバ屋へ電話して、二人前注文してやった。天井が来た。フタを開けると家じゅうが匂つた。御相伴の私はニコニコして、割箸をブチンと割つた。

「ホレ、この天婦羅ホンモノの海老だ!」

私ますますニコニコしてたら、その時、突然強そ

うな産婆が入って来た。寝起きのいい顔で、私よりもっとニコニコして云った。

「アーラ美味そうなこと、ソレハ御馳走様。先生も気のきいたことすんのネ」

体格のいい女たちは、私のドンブリを引ったくって



ペロツと食べた。

茶をついでやると、強そうな産婆は、天婦羅で光った口のまわりを白衣の袖で拭く、ガブガブと茶を飲み、そして云った。

「サアテ、これからヒト戦争だよ奥サン」

すっかり腹ごしらえした戦士たちが、また隣室へ戻っていった。だが二人はそこで牛みたいにグッスリ眠る気なのだ。

明けがた、元気な声で赤ン坊が泣いた。

「先生、女の子だ!!」

強そうな産婆が怒鳴った。

この女の子は、長男のときより、ずっと大型で、太っていた。泣声も母親に似て、大袈裟だった。

——ウチでは、やっぱり女の方が立派なのだ——

その日ずうつと、隣りの部屋では、体格のいい女たちが喋っていた。アノ、驚鳥みたいな声を出す方が産婆だ。

「ナンだカんだ云ったってサ、男なんて奴は、女に子供産ませるしか能がねえんだよ奥サン」

「マツタクだ。アレでも医者だつてんだからねエ」

これはウチの奴だ。産後の肥立ちはチットモ心配はない。

此の項終り



風薫る白雪山に

## 納経塔上棟式盛大に執行

五月十七日、十一時から本堂で、月例法要並に納経塔上棟式報告祭が執行されました。

十一時三十分から百数十名ご参列のもとに、納経塔に於て莊嚴に上棟式が執行され、香煙塔内に立ち上り読経のうちにご参列の方々焼香をなさいました。

高さ十四米のガンダーラ式納経塔は、折からの五月晴に、面白岩山頂の新緑の中に、一極莊嚴にそびえ立って、その雄大さには参拝者一同目を見張り感激しておられました。

終了後救世大観音下の山の家に於て、盛大なる清めの宴が、和やかなうちに取り行なわれました。

この時間祖平沼先生からのごあいさつがあり、次いでご来山の方々を代表して、千田儀一郎殿からお祝詞を賜り、新緑の香と老鶯の声にうっとりとして和やかにお過ごしいたゞきました。

納経塔上棟式  
(総高14米)の上部→

写経塔の入口  
↓



# 写経塔建立に就て写経のお願い

## ◎般若心経一万巻

昨秋、白雲山に救世大観音を建立し、有縁の皆様から、ご先祖尊霊供養のため、一万体観音奉安を発願いたしました処、八千余体に及ぶ奉安を賜りまして感激致しております。

就きましては新たに大観音に相對して前記の通り納経塔の上棟式を五月十七日舉行いたしました。

そして此の内部に般若心経一万巻の写経の奉納をお願いする次第であります。

「写経をした人の功德は無量無辺にして、よく一切の種智を生ぜん。」とか又「一文字の写経には一鉢のご仏体を刻むより大きい功德がこめられる。」とか、この浄業により「浄菩提心」をいただき無上の喜びが得られる等教えられております。

何とぞこの浄業にご理解を賜りまして、よろこびを味わっていただきますようお願いいたします。

## ◎写経のお申し込み方法

写経用折本は、納経回向料を含み一卷が金五百円、お一人様でもなるべく多くお願いしたいものです。

お申し込みと同時に、ご納金願いたく存じます。

写経願旨、○○家先祖代々霊位又は御法名、其他。

## ◎御申し込みと、ご送金の方法

御申し込み書の送り先

埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音電話(〇四三七四)二七五  
練馬区小竹町一の五二平沼方電話(九五五)〇四六五

## ◎御払込み先

埼玉銀行 名栗支店 鳥居観音 納経口座

埼玉銀行 練馬支店 鳥居観音 納経口座

又は振替用紙にて郵便局振込(口座)東京一五八八五

御申し込みの際は、この用紙を御利用下さい。

きりことり線

写経折本申し込み用紙					写経用折本巻数
					ご住所
					ご芳名
					取扱者

# 写経のお世話人各位のご芳名

順序不同敬称を略させていただきます。

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
東京	伊藤正雄	東京	杉山慎	埼玉	塚本方山	埼玉	井上竹吉
東京	新妻治郎	東京	喜代永政雄	埼玉	高橋翠川	埼玉	鈴木すゑよ
東京	北川教全	埼玉	下世古三雄	埼玉	鍋田聖城	埼玉	武居藤吉
東京	船口暉子	埼玉	島田かよ	埼玉	八木江堂	埼玉	岡部由次郎
東京	山口貴美子	埼玉	石毛銀一	埼玉	外岡梅逕	埼玉	水上清
東京	来馬秋子	埼玉	穴戸睦子	埼玉	望月永泉	埼玉	小林貞治
東京	西端さかえ	埼玉	小峰久治	埼玉	大和多白湖	埼玉	小山権之丞
東京	山口奈可	埼玉	鈴木嘉三	埼玉	久保田夾月	埼玉	有馬忠直
東京	桐木房江	埼玉	宮沢庚子生	埼玉	久保田江濤	埼玉	岡部喜代子
東京	高田与志子	埼玉	竹村勝子	埼玉	関部喜代子	埼玉	原田里う
東京	高橋つね	埼玉	久保田睦子	埼玉	藤沢やす子	埼玉	町田八千代
東京	若林とく	埼玉	猪熊夏子	埼玉	飯塚孝司	埼玉	吉崎弘
東京	西沢はる	埼玉	西村みつ	埼玉	長島千鶴子	埼玉	東京
東京	平岡くに	埼玉	松田江畔	埼玉	井上正雄	埼玉	以上各位にお世話人として、ご尊名を拝借いたしました。尚相当地間の要する納経計画なので、増加になることが予想されますがよろしくお願いたします。
東京	小佐野英子	埼玉	吉田三郎	埼玉	横溝喜久雄	埼玉	
東京	菊池智子	埼玉	霜田一笠	埼玉	梶谷真一	埼玉	
東京	渡部田鶴子	埼玉	吉田一男	埼玉	原田愛助	埼玉	
東京	竹村吉右衛門	埼玉	井島震岳	埼玉	齊藤新作	埼玉	



# 第九集

二月より五月までの御申込  
 一、敬称は略させていただきます  
 一、〇印はA観音  
 一、間違がありましたら御教示くだ  
 さい

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
名栗	岡部千三	所沢	鈴木直次郎	所沢	吉井政達	所沢	北田正二	入間市	宮岡由蔵	狭山市	石川長吉
横濱	村上道隆	所沢	鈴木敏二	所沢	田中千代子	所沢	新藤徳司	入間市	青岡文助	狭山市	森田通義
練馬	松本徳三	所沢	稲谷忠平	所沢	見沢つね子	所沢	栗原英夫	川越	大宮義保	大宮	長谷川欽一
吉祥寺	越谷梅夫	所沢	小高保雄	所沢	佐々鶴雄	所沢	島崎竜平	狭山市	横濱源一	横濱	古根村ハツ
飯能	小熊智一	所沢	金子富吉	所沢	小暮雅雄	所沢	島崎正吉	大宮	青田忠一	飯能	技久保雅弘
入間市	大沢文次郎	所沢	永沢つる	所沢	桑垣繁	所沢	茨城菊地さく	大宮	飯能	飯能	技久保昌昭
大宮	島崎よね	所沢	鈴木金作	所沢	平塚クラ	所沢	森田半十郎	船橋	名栗	荒川村	浅海重一
浦和	宮本カツ	所沢	星野定雄	所沢	粕谷金司	所沢	平塚江	調布市	松岡英博	小金井	星野正満
所沢	安原寛	所沢	石井源吉	所沢	内野保	所沢	竹内貞子	清瀬	山本富美子	入間市	島田要雄
練馬	長井英照	所沢	浅海源守	所沢	江口アサ子	所沢	岸昇	港区	山崎	千代田区片倉チッカンKK	
名栗	吉田博之助	所沢	藤野久良子	所沢	肥田野準一	所沢	小高太助	長崎市	飯島節子	狭山市	忍城いち
墨田区	渋谷長太郎	所沢	並木甚造	所沢	川口重雄	所沢	大館文雄	諫早市	飯島忠男	名栗	本橋寅一
所沢	松本幸男	所沢	山本富美子	所沢	小暮武一	所沢	望月政勝	川越	塩入花子	所沢	宮本義一
所沢	沢田徳太郎	所沢	松岡英	所沢	粕谷理一	所沢	田村賢市	川越	吉沢外体	所沢	佐野貞治
所沢	指田和吉	所沢	平塚義角	所沢	小畑雅信	所沢	山本宗平	調布市	小林公人	所沢	本橋義治
所沢	藤野美夫	所沢	新井喜久治	所沢	川原信二	所沢	永田綾子	町田市	萩原進	所沢	辺春まつの
所沢	並木和夫	所沢		所沢	室岡常造	所沢	村井幸子	狭山市	岸善八	所沢	矢島貞子

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
練馬区星野	正園	狭山市中山	勝郎	中野区佐々木	文三郎
港区米村	直枝	入間市八嶋	捷祐	中野区目黒	吉永
大田区岡島	昌恵	所沢岩崎悦太郎	三鷹市竹内	武蔵野	藤作
名栗浅見	うめ	所沢岩崎	レン	中野区谷口	憲治
所沢小高	太助	世田谷本田	智光	杉並区湯河	康子
名栗田中	正二	毛呂山町町田	詠司	第九集合計	一四〇
名栗滝島	由之	所沢松本	成夫	内訳	BA九二
文京区川島	孝男	大宮梅津	孝二	内訳	七、八二八
江戸川区石上	孝男	川崎藤野	真夫	累計	BA一、四八四
川崎市石井	豊高	大田区高瀬	武雄	内訳	BA六、三四四

### 鳥居観音だより

第九集におきまして、以上のような数となりました。  
 ○今後も引続いて、広く多くの方々から信仰を通じてご奉安いただきますようお願いいたします。合掌

○春季例大祭と耆万体第二次奉安式、四月十七日、朝十時から、本堂、玄装三蔵塔、救世大観音と、順に執行し、第二次耆万体観音奉安(二七二体)をしました。

川越の新友講(講元齊藤新作氏)、ご一行五十名を始め、各方面からの参列者各位で二百名に及びました。

式後、つつじの花盛りなので、山小屋で中食をとっていただきながら、ゆっくり風光を味わっていただきました。  
 ○花祭り五月八日、晴本堂に花御堂、甘茶を用意して午後一時三十分から、花祭りを執行しました。

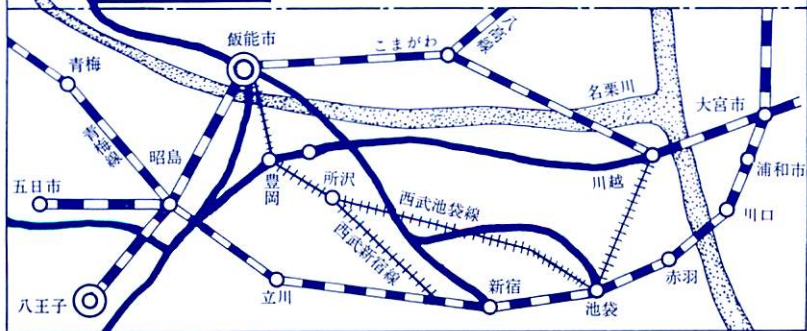
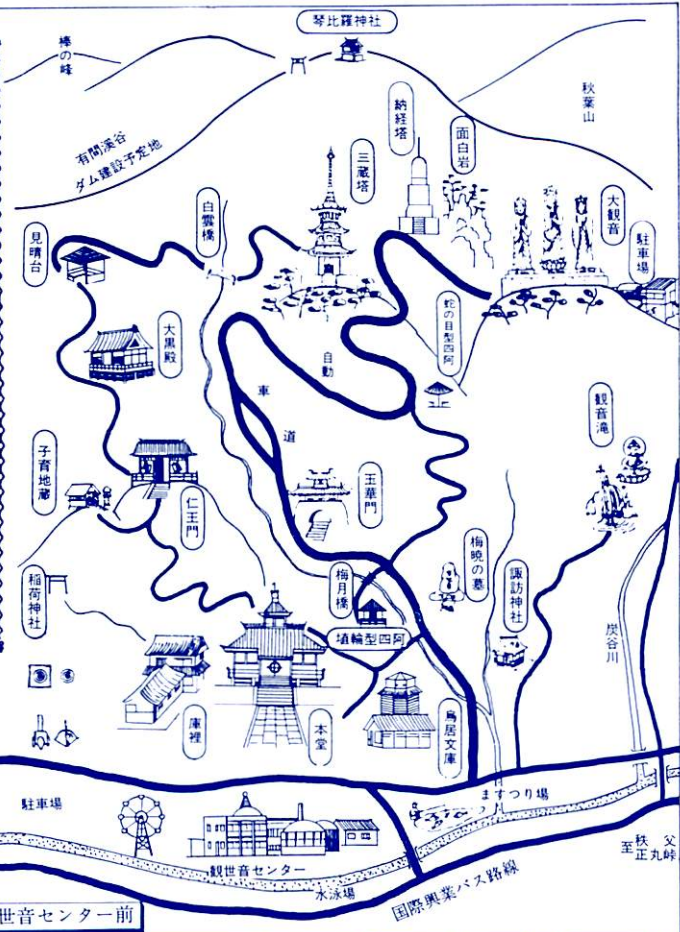
○日本火災海上保険(株)物故者慰霊祭、五月十五日晴十二時から二台のバスに分乗なさって、右近社長、吉永会長、亀山相談役、野口さつき会長、の四氏を始め、百名に及ぶ役員社員各位が来山され、平沼先生ご夫妻も列席されて、導師として有馬老師、これに平野、鯨井の両師がしたがって、げんしゆくに執行されました。  
 ○満蒙義勇軍大和拓友の慰霊祭、五月二十八日

名栗の土地が大和拓友の人達が北満で開拓に当られた処に、似ていると云うことと、耆万体観音に亡き拓友の霊を奉安して慰霊しようとする、崇高な意途をもって、当山が選定されました。午前十一時、拓友の關係者百余名着席、平沼先生臨席、導師有馬老師と平野、鯨井両師参堂、おごそかに執行されました。

とりあ 第二十三号 発行日 昭和四十七年七月一日  
 編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三  
 発行人 浦和市仲町二ノ八ノ十五 武州印刷株式会社  
 印刷所 鳥居観音 電話〇四二九七〇四名栗二七五番  
 発行所

# 白雲山

鳥居観音  
観世者センター案内図



## 夏の行事

7月17日 月例法要 本堂10時（毎月執行）  
引続き、玄装三蔵塔、救世大観音と、一万体観音の法要を執行します。

## 孟蘭盆流灯供養会

8月16日 16時 本堂供養 夜に入り18時半、名栗川に流灯供養。

### 流灯供養申込方法

8月10日頃迄に、鳥居観音へ申込んでください。供養料は1灯 金500円です。

お拂い込先 埼玉銀行名栗支店  
又は名栗鳥居観音

## 花火大会と盆踊り

8月16日 19時頃流灯供養が終る頃、観世音センター下の川原から、花火が打ち上げられて、夜空にいろどられる様は何とも云えません。その頃本堂下の広場には中央にやぐらが組み立て、孟蘭盆をたのしむ人々と、観世音センターの泊り客等が入り乱れて、くり上げられる踊りの輪はたのしくも又夏の思いでの一頁ともなります。